第2章 青葉区の将来都市像

1 将来都市像

個性豊かに成熟した都市「丘の横浜・青葉区」 ~誰もが住みたい・住み続けたいまち~

青葉区が誕生したときの区づくりの目標は「個性豊かに成熟した都市『丘の横浜・青葉区』」 としており、「豊かな緑に抱かれて、安らかで快適な暮らしが息づくこの街は、人のぬくもりに 満ちたコミュニティ。イキイキとした生活文化を発信する丘の街」という意味が込められてい ます。

これは青葉区の地形的特徴を表現するとともに、これまで維持・創造されてきた水と緑の自然的環境と魅力的な住宅地の街並みを、今後も引き続き維持・発展させ、個性あるまちづくりを進めていくという方向性を表しています。また、子どもから高齢者まで多様な世代が集い、イキイキと個性的な活動を進める活力あるコミュニティの姿を表しています。

このような青葉区の姿は「『次世代に引き継ぐまち』を目指す」という理念のもと、今後も引き続き目指すべき区の姿です。

既に青葉区に生活している人が住み続けたいと思い、区外にお住まいの人も青葉区に住みたいと思う、誰もが「住みたい・住み続けたい」と感じられるまちが青葉区の将来像です。

よって、「丘の横浜」として形成されてきた魅力あるまちを維持し、それを多様な世代にとって望ましい形で成熟させ次の時代に残すことを、まちづくりに関わる住民、事業者、行政共通の青務として、この将来像を掲げるものとします。

2 将来都市構造

将来都市像を実現するため、鉄道駅周辺の利便施設へのアクセスが容易にでき、まとまった 自然の魅力を身近に感じられ、さらに環境負荷の少ない都市構造として、鉄道駅を中心とした 集約型都市構造を基本とします。また、鉄道が区域の南側及び西側に偏って通っていることか ら、鉄道駅周辺だけでなくより身近なエリアにおいても、日常の生活に必要な機能を集積した 拠点を設けます。

(1) 水と緑の骨格

丘を浸食することにより青葉区の地形を形成してきた河川とその周辺の樹林地・農地を結ぶ 水と緑のネットワークを構成します。



水と緑の軸

鶴見川(谷本川)、早渕川、恩田川・奈良川とその周辺を水と緑の軸 とします。河川周辺には農地や公園などのオープンスペースを確保す るとともに農業を振興し、多様な生物が生息できる環境を保全・創造 します。



緑の拠点

横浜市の緑の10大拠点のひとつと位置づけられているこどもの国周 辺地区の樹林地や農地を保全し、谷戸、ため池などの青葉区の原風景 を保全します。

緑のネットワーク

恩田元石川線等により、3つの水と緑の軸や緑の拠点を結ぶ緑のネッ トワークを構成します。

(2) 都市活動の拠点

都市活動の拠点として、鉄道駅周辺等を生活拠点・(仮称)生活支援拠点と位置づけます。



い生活拠点

たまプラーザ駅、あざみ野駅、江田駅、市が尾駅、青葉台駅の各駅を 駅勢圏が大き 中心とするエリアを「駅勢圏が大きい生活拠点」とし、それぞれの圏 域の大きさや特徴に合わせた商業・業務・文化・スポーツ・行政サー ビスなどの機能を集積し、個性ある拠点を形成します。



体化

生活拠点の一 たまプラーザ駅からあざみ野駅にかけては、連続的なにぎわいを創出 します。



い生活拠点

その他の駅を中心とするエリアを「駅勢圏が小さい生活拠点」とし、 駅勢圏が小さ 日常の生活に必要な商業などの機能を集積します。高速鉄道3号線 (市営地下鉄ブルーライン) の延伸によって新駅が開業した場合につ いても同様とします。



(仮称)生活支 援拠点

駅まで離れているため徒歩で出ることが難しい大規模団地を含むエ リアを「(仮称)生活支援拠点」とし、日常の生活に必要な商業など の機能を集積し、生活利便性を維持・向上します。

(3) 交通ネットワーク

都市活動を支える交通ネットワークを、鉄道、道路によって形成します。また、バス交通の 充実を図ります。

4000

鉄道(既存路線) 鉄道(計画路線)

東急田園都市線、こどもの国線及び高速鉄道3号線(市営地下鉄 ブルーライン)により鉄道のネットワークを形成します。

骨格道路

国道 246 号線、日吉元石川線、横浜上麻生線、環状 4 号線、真光 寺長津田線、川崎町田線、新横浜元石川線及び恩田元石川線、区 内の主要なバス通りである奈良西八朔線と黒須田133号線により 区内を結ぶ格子状の骨格道路網を形成し、地域間の移動と交流を スムーズにします。



広域道路

東名高速道路、高速横浜環状北西線、国道 246 号線により都市間 を結び、広域的な移動と交流をスムーズにします。

